

子供が帰ってきて二人の生活がはじまりました。十日ほどたって、名橋猿橋の橋のたもとに桜の花の咲く頃、この町におまつりがありました。

夜店が出るというので、

「おまつりへ行ってみようか？」

と私がいうと、徹也君はうれしそうにならずいて、立ち上がりました。

私たちは、つれ立って夜の町へ出ました。

まばらに店が出ていて、いつも寂しい町が珍しくにぎわっています。おみこしを飾ってある、竹でかこったかこいの中に顔見知りのおじさんたちが、一杯機嫌きげんでいました。

私達は初めて親子でおまつりに来ました。三十歳をすぎた息子と、五十歳半ばの母親は、いそそとして店を見て歩きました。

「何か欲しいものがあつたら買ってあげる」

と、私がいきました。

「わた菓子がいい」

と、あの子がいきました。

「小さいときね、木村のお父さん、とてもきびしくってね、子供にお小遣いを持たせないのよ。他の子供がわた菓子持っているのをうらやましくって、見ていたことがあるんだ」

と、彼はいいました。

「子供は、どう育てるのがいいのか、私には何にもいう資格はないの。でもこうして、二人で歩いていると、遠い昔から、二人で暮らしていたような錯覚がするのね」と、私はいいました。

すばらしい夕暮でした。二人は並んで、わた菓子を食べながら歩いていました。ふと私は、急に、目の前が暗くなってきました。いつもの目まいかと思って、橋げたに よりかかって休んでいました。私の目には、白くかわいた坂道が見えました。枯葉が、かさこそと鳴ってその白い道を吹きすぎてゆきました。「この道は、どこへ行くの？」と私の中で、たずねたものがありました。「この道は、火葬場へ行くの」と、私の中で答えたものがありました。「誰が？」とまた一つの声がたずねました。「もちろん、あなたの子供が」と、はっきり答えたものがありました。「え？ 何を、今何をいったの？」と、私は声を出していいました。ふっと、あたりが明るくなったのです。

「どうしたの？ お母さん、まっ青だよ」

と、わた菓子を食べかけて、あの子がいきました。やさしい声でした。

「あ、大丈夫、何ともない」

と私は答えて立ち直りました。

おかしなまぼろしであったと思いましたが。あの白い、かわいた道は？ と、私はもう一度確かめようと思ったのですが、もう何も見えなくて、夜店の電灯が、明々ともっていました。きれいな電球でした。

二人は、いろんな話をしました。

刑務所の中の話は、珍しい世界でした。さらに、やくざの世界のことは、なお私には珍しい話でした。どんな話でもよかったです。私はそのすべてがおもしろくてなりませんでした。いつもおかずに出る、ひじきと、油揚げの煮たの……卵なんてねもう幾年も食べていないよと、彼はいきました。なぜなら一人に一個ずつつけなければならぬからね、と笑うのです。朝は決まって、「エリーゼのために」という、音楽が鳴ると起きるのだと話していました。音楽が鳴って起きるなどは、どうしてなかなかの文化生活だと感心いたしました。

夕暮れがきれいでした。

山の方へからすが飛んでゆきました。

からすなぜ鳴くの？

という歌が聞えると、こみ上げて泣いた日は、夢のように消えて、私はゆっくりとからすを見送っていました。

可愛七つの子があるからよ……と私が歌うと、子供は笑って、

丸い目をしたいい子だよ……

と、合わせました。もう、泣くこともない、この子が帰ってきたのだから……と私は思いました。

「よかったわ、ほんとうに」

とんことんこ、とお祭りの太鼓の音がしていました。私たちは手をつないで、夜道を歩いて帰りました。

しっとりとした夜の霧で、町は美しく新しく見えました。